

橘守国画 『謡曲画誌』 小考

松岡 まり江

はじめに

橘守国（1679～1748）は大坂の人、名を守国または有税、後素軒と号した。狩野探幽の弟子、鶴澤探山に画を学び、狩野派の画を能くしたが、絵手本の出版をとがめられ破門されたと伝えられる。生涯で20冊を超える絵本・画譜等を手掛けており、近世の上方絵画の展開を辿る上で欠かすことのできない絵師の一人である。

「精密奇巧此人より起る」という評にふさわしく、彼の手掛けた版本は先行諸本に比べ精緻な出来栄を示すもので、絵本として鑑賞されるとともに、画を学ぶ者たちに絵出本として用いられた。特に、近年高い人気を誇る伊藤若冲や曾我蕭白というような、既成の流派に属さず活動した絵師達の制作において、守国の画譜や絵本が与えた影響は大きい。

『絵本写宝袋』（享保5年（1720）刊）など単独制作の絵本・画譜の他に、中国の風物を紹介する百科事典である平住専安著『唐土訓蒙図彙』（享保4年（1719）刊）の作画も手掛けた守国であるが、本稿で取り上げる謡曲の概説書、『謡曲画誌』の画はやや印象を異にするものである。画譜の類では概して精密で筆数の多い漢画が多くみられるが、本作はかなりあっさりしたやまと絵風の画で統一されている。仲田勝之助氏は『繪本の研究』の中でこう評している。

「守国自らは謙遜して、「秃筆鄙図、内に筆力なく、外に芳艷を失ふ」と言っているが、その通り左様に優れた絵本ではない。唯謡曲をモチーフとして百図も作った処に又一天地を拓いたものといえよう。……（中略）……画態は守国の自在なる構図、縦横なる筆力を見るに役立ちこそすれ、守国の画蹟を発展的に眺むれば一種停滞気味であり、いわば渦を巻いている形でそこに何等の発展もないと言えよう。これあまり高く評価し得ざる所以である⁽¹⁾。」

同じ本で守国を「画世界の一代人物」と高く評価する仲田氏をしても、『謡曲画誌』の守国画は50代の停滞期の作品として受け取られているに過ぎない。絵本を手掛けた上方の絵師の中では比較的研究の進んでいる守国であるが、本作の

画についての論考は未だ提出されていない。

仲田氏が述べられたように、『謡曲画誌』の画は他の版本のような流麗さには乏しい。

しかし、改めて個々の絵を本文や曲の内容と突き合わせて見てみると、概説書という本の体裁を重視し、内容に沿った細やかな作画の工夫が随所に看取できる興味深い作品である。

よって、以下の章で検討を試み、若干の考察を加えたい。

『謡曲画誌』書誌と基本情報

まず、今回検討に使用した早稲田大学演劇博物館本について、書誌の一部を抜粋する。

表紙外題 第一冊： 謡曲畫誌 享保壬子春出版
後素軒橘有税子画 卷壹式（第五冊まで同様）

冊数：十卷五冊 壹式・參四・五六・七八・九十と二卷ずつの合冊本

（十巻十冊本が多く現存することから、演博本は合冊本に仕立て直したものと考えられている。）

寸法：22.5×15.7cm

本文印刷：墨一色刷り

刊記：「右此本觀世左近太夫 正本考之而撰画図文義者也 享保二十乙卯年正月吉日

京師書林 二鳩堂 今井喜兵衛 額田正三郎 井上忠兵衛 中野宗左衛門

今井七郎兵衛 梅村三郎兵衛 田中庄兵衛 全版」

著者は、山崎闇斎門下の朱子学者、中村三近子（1671～1741）。画は上述のように橘守国が担当した。卷一に三近子と守国による享保17年春の序が載り、卷十には三近子による「享保十七年壬子閏五月發行 洛陽 中村三近子編集」の記述が見える。

内容は一冊ごとに謡曲五番を取上げ、曲の解説と一曲につき各二図、見開きの絵図を付すものである。本作については小林保治氏と石黒吉次郎氏によって既に影印・翻刻・訳注本が出版されているほか、『訓蒙図彙集成』にも全冊が収録されている⁽²⁾。小林氏は、本作について、謡曲の梗概のみに終始せず和漢の伝承・人物論・漢籍漢詩の引用が多い儒教的・啓蒙的な読み物と評されるとともに、両名の序から、成立の過程について次のように考察されている。

まず兩人の間にこうした本を作ろうという話があって、先に謡曲五十番について書かれた三近子の文が、大坂の画工・有税のもとに届けられた。それにもとづいて有税が謡曲百画を描いて三近子に届けると……（中略）……百画

のできばえにいたく満足し、題名を「謡曲画誌」とした。一方、有税は「秃筆鄙図、内に筆力なく、外に芳艶を失す」と不本意なできばえとして櫃に納めてぐずぐずしていた。それを大坂の書肆・毛利田が……（中略）……たびたび懲憑するので、やむなく旧稿をひもといて再三増減の手を加えて上梓を許した。

守国画の検討

本作の画、計103図を試みに後掲（表2）のように整理した。

既に指摘されているが、演目の分類を見ると、巻四以降齟齬があるものの、各巻の曲順は基本的に五番立の番組構成に沿っていることが分かる⁽³⁾。近世期に確立されたとされる五番立は、まる一日かけて翁・脇能・脇狂言・二番目修羅能・二番目狂言・三番目鬘能・三番目狂言・四番目雑能・四番目狂言・五番目切能・祝言能と能七番、狂言四番を演ずる大がかりなものであった。本書の画は巻一「翁」冒頭の舞台図に始まり、巻五の切能「融」退場図と祝言を表す吉祥図とで結ばれており、さながら読者を、現実世界から能の展開する物語世界へと、徐々に誘いこむような洒脱な構成をとっている（図1～3）。また、各図が具体的に曲の何処を描くかを調べたところ、基本的に二場ものの「前場」「後場」を一図ずつ描くものであった。以上のことから、本作の画は事前に構成を十分に検討した上で作画されたと分かる。

守国は序文で「三近武林、謡曲五十番を述べて家台に投ず。税又謡曲百図を撰み、将に校画の一助に便せんとす」と、三近子とのおおらかなやりとりを伝えているが、実際は作画に際して著者の三近子から細かい指定が為されていたと推察される。学識豊かであったと伝えられる守国であるが、続く「筆藁を蔽置に韞めて未だ態校を為ず」という一文は、作画における考証の苦労を物語るものだろう。

さて、曲の内容に照らしつつ守国の画を見ていくと、全103図は、作画のスタンスによって以下のようにいくつかのグループに分類することが出来る。今回、後掲の表（2）「分類」の項で下記の6つにグループ分けを試みた⁽⁴⁾。

- ① 能舞台の様子を描く挿絵のグループ。（図1～3、計2図）
- ② 謡曲の展開する物語世界、または典拠となった文学作品—『平家物語』『伊勢物語』等—の世界を描くグループ（図4・5など、計39図）
- ③ 謡曲の舞台となる名所—「竹生島」「石山寺」等—を名所絵風に描くグループ。（図6・7など、計9図）
- ④ 関連する和漢の故事の絵画化。（図8・9など、計9図）
- ⑤ 基本的には曲の内容・装束に沿うが、背景が自然景であるなど物語の設定に

即した表現が見られるグループ。(図10・11など、計8図)

⑥⑤より物語色が強く、一見して物語絵風であるが、演者の人数や小道具などに能舞台の要素が加味されているグループ。(図12など、計35図)

『謡曲画誌』の守国画に特異であるのは、上記⑤⑥のグループの存在で、全体の4割を占める。

舞台の様子をそのまま描く①のグループは前述の「翁」と「融」に付される各一図のみである(図1・図2)。⑤は表2で「舞台風」としたように、装束や小道具等、能の舞台の様子をよく反映するものである点で①と近い。しかし「采女」では春日社、「松風」は須磨浦の浜辺という具合に、自然景が背景となるほか、面を描くことを避ける。

一方、②や④の物語世界・和漢故事を描くグループは、完全に曲の展開する物語世界、或は典拠となった文学作品・故事のイメージを絵画化したものである。登場人物の人数は能の舞台と齟齬が見られ、多くが浜辺や山といった自然景を背景にとる。このグループは絵手本を多く手掛けた守国には、描きやすいものであっただろう。「李將軍」のように、他の守国絵本と類似する図も存在する(図13～15)。しかし、数でいえば②は⑤⑥と拮抗しており、一見物語世界を描いているようで、演者の人数や作り物・小道具が能の舞台に沿っている例が多い。たとえば⑤のグループの、「鉄輪」の祭壇や「国栖」の舟など(図16・17)、曲に特徴的な作り物が登場することで、実際の舞台を見たことがある読者は、舞台と画をよりよく重ねてみるのができただろう。全体の構成同様、考証が画に反映されていることがこの点からも分かる。

③の名所図は9図を挙げることが出来る(表1)。本書に先立つ『唐土訓蒙図彙』(享保4年刊)で『三才図会』を参考に中国の名山・名所を描き、『画典通考』(享保12年(1727)刊)では巻二～巻四にかけ和漢の名山や名所を描いた守国の経験が作画によく生きている(図6・7)。

(表1)『謡曲画誌』にみられる名所図風挿絵

	巻数	曲名	図No.	地名等の書き入れ(抄)	主なモチーフ
1	巻2	兼平	14	短冊形に「粟津森」など4か所	琵琶湖畔・ワキ・前シテ
2		老松	22	「紅梅殿」など3か所	大宰府天神社の境内図。
3	巻3	頼政	24	「宇治乃景」、短冊形に「平等院」など7か所	宇治川、平等院・ワキ・前シテ

	巻数	曲名	図No.	地名等の書き入れ（抄）	主なモチーフ
4	巻4	弦上	36	「須磨の浦乃景」	須磨の浦、塩焼き小屋・ツレ・アイ
5	巻5	賀茂	43	「社の景」、短冊形に「本社」など5か所	上賀茂神社境内図。
6	巻6	竹生島	53	「竹生嶋乃景」、短冊形に「弃天」など2か所	竹生島弃財天・波を渡る兔・ワキ・前シテ・ツレ
7	巻6	源氏供養	61	「石山寺の景」、短冊形に「本堂」など4か所	月下の石山寺。点景人物のみの山水画。
8	巻8	江口	76	「淀川」、短冊形に「江口ノ寺」など2か所	淀川畔の江口の寺・佐多天神の図。 川には点景で曳舟の様子が描かれる。
9	巻10	三井寺	99	曲名として「三井寺」	春の三井寺の景。

ほぼ各巻に1図付されたこれらの図は、『謡曲画誌』の訓蒙図彙的な側面を示すとともに、謡曲というモチーフの性質上、人物にクローズアップすることが多く、構図がマンネリ化しがちな本書挿絵の良いアクセントとなっている。短冊形に付された地名の書き入れから、名所図会からの引用、もしくは他の守国絵本と、図様が共通する可能性が考えられるだろう。

しかし、多くの図には、大小の演者が描き込まれており、「竹生島」には弃財天の使いである、波を渡る兔の姿が添えられる（図6）。図の脇には謡曲の一節を表す「緑樹影沈魚上樹 青波月浮兔走波」が見える。名所絵風の体裁をとりつつも、細部には曲に沿う図様が挿入されているという点では、前述のグループ⑥に近いスタンスの作画といえるだろう。

以上の分類に基づく検討から、全体について次のような性格が指摘できる。

前述のグループ⑤⑥、さらに③といった本作の画の多くは「舞台」と「物語」、「舞台」と「名所」の、いわば狭間の世界を描いている。

「翁」の舞台図から謡曲の世界に誘い込まれた読者は、能舞台そのものの図ではなく、各曲が展開される場所—自然景の中、あるいは邸内—を描く画によって、より容易にその物語世界に入り込むことが出来る。しかし、本作の優れた点は、能舞台に使用する作り物や小道具、演者の人数などの考証がそれら物語風の画に巧妙に反映されている点にある。読者は知らず知らず、舞台と物語の間を往還しながら、曲に対する理解を深められることになる。本書の守国画の価値は、舞台

図100図超の羅列に止まらない図のバリエーションと、こうした細やかな工夫にあると言えるだろう。

著者の三近子は、序で守国画を讀えてこう記す。「撰城ノ画生橋ノ有税ハ兎穎奇ニ入り、漚池玄ヲ彩ス。茲年壬子ノ春、謡曲ノ精ヲ模シテ、百図既ニ就」三近子のいう「謡曲ノ精」とは、守国の描いた挿絵の持つ、こうした特質を評価した言葉ではないだろうか。

『謡曲画誌』の成立について

小林氏は『謡曲画誌』の成立の文化的背景について、以下の二点を指摘されている⁽⁵⁾。

①能の台本である謡曲の注釈書が求められるようになり、文禄4年(1595)に『謡抄』が成立、寛文元年(1661)に『諷増抄』が著されたこと。

②享保の改革以降の絵本や絵入り本の盛行、具体的には貞享4年(1687)の『能之訓蒙図彙』(四巻)の刊行。

『能之訓蒙図彙』は舞台・面・装束の解説や小道具の図解、四座の役者名簿、謡の目録、京都の能役者名簿から成るが、各曲の概説などは掲載していない⁽⁶⁾。

この種の版本の例として今一つ『能之図式』(六巻、『舞楽秘曲』『舞楽秘曲大成』『能之図式大成』とも)が知られる。『国書総目録』によれば、元禄10年(1697)版と正徳5年(1715)版が現存する⁽⁷⁾。内容は『能之訓蒙図彙』に非常に近く、四座の由来から始まり、舞台の図、面の図、小道具の図、作り物の図が載るが、それらと並行して巻二から巻六の本文は「能之衣裳付」という200曲各々に用いる面・装束・小道具等の列挙がその大半を占める。さらに、「翁」「高砂」など27図の舞台図が掲載されている点が重要である。

版元は『能之訓蒙図彙』と同じ京都の谷口七左衛門であり、面の図様など多くが共通することから、『能之訓蒙図彙』の増補版として出版されたと考えられる。絵師の名前は明らかではないが、舞台の装束・小道具・囃子方までの確に細かく描くものである。『能之図式』については今後、『謡曲画誌』に先行する作品としてさらなる検討が必要であろう。しかし両者は性質が大きく異なるため、画にも直接的な影響関係はないものと推定する(図18～20参照)。共通する曲も『能之図式』巻一「翁」「高砂」、巻四「難波」「張良」、巻六「放下僧」の五つのみで、図像も類似するものではない。また『能之図式』挿画は見せ場である舞の様子を中心に描くのに対し、『謡曲画誌』は「融」退場図を除いて登場人物は面を着けておらず、舞のシーンを避けて描かれている。唯一「木賊」に老人が舞う姿が簡潔に示されるのみである。

舞台を描く解説書『能之図式』から、謡曲のストーリーに舞台の趣を添えた『謡

曲画誌』へ—この流れは、江戸初期、武家や公家の嗜みであった能とは別に、詞書を謡う「謡」が庶民の間で流行した当時の世相とリンクする。『謡曲画誌』は、能を嗜む上流階級は勿論、謡を楽しむ中間層の好奇心を満たすビジュアルブックとしての役割も果たしただろう。さらにやや下る年代の版本の作例として、謡曲を部分的に抜き出して謡う小謡の謡本には、本書のように曲の情景を描いた挿絵が載るほか、漢字の部首一覧表や「投入れ立花の図」等様々なコラムを収録し、より訓蒙書的な色彩が強いことが注目される（図21）⁽⁸⁾。

おわりに

以上、『謡曲画誌』の守国画について少々考察を試みた。他の守国絵本との比較や共通図像の探索など検討課題は多い。画のイメージソースについても興味を持たれる。装束・作り物・小道具の描き込みから考えれば、多くは守国自身が考案した図様と思われる。謡曲の題材は『伊勢物語』『平家物語』等知名度の高い作品から多くとられているため、それまでの絵手本制作で培ったキャリアは大いに役立ったことだろう。しかし100図超という膨大な量の作画にあたっては、自身の手控えの他に、版本なり先行絵画なりを改めて参照した可能性は高いだろう。小道具・装束・作り物に関しては多く図解する『能之図式』も資料として参照したかもしれない。

また、享受層は異なるものの同時代に多く制作された絵入浄瑠璃本・絵入狂言本・浄瑠璃絵巻等の存在も、今後考察を進める上で示唆的である。こうした作品の挿画にも、しばしば物語絵と舞台のスケッチを組み合わせたような、折衷的な態度の画が存在することは興味深い。

さらに守国の序にある「校画ノ一助ニ便セントス」という言葉通り、他の絵師達が能・謡曲を主題にとる画を描くにあたっては、本書は画題事典替わりとなっただろう。本書を手本とした絵画作品についても、その探索が期待されるところである。

絵本・絵手本の類に比べ、等閑視されてきた『謡曲画誌』は、このように様々な発展性を秘めた作品である。本作が今後、そうした本格的な考察の対象に挙がることを願って稿を結びたい。

注

- (1) 仲田勝之助『絵本の研究』美術出版社、1950年。
- (2) 朝倉治彦 監修『訓蒙図彙集成 第一二巻 能之訓蒙図彙』大空社、1998年。
小林保治・石黒吉次郎編『謡曲画誌 影印・翻刻・訳註』勉誠出版、2011年。
- (3) 小林氏、前掲『謡曲画誌 影印・翻刻・訳註』解説。
- (4) 巻十、第103図「祝言」については、分類が困難であったため除外した。
- (5) 小林氏、前掲『謡曲画誌 影印・翻刻・訳註』解説。
- (6) 朝倉治彦 監修『訓蒙図彙集成 第一二巻 能之訓蒙図彙』大空社、1998年。
- (7) 武田恒夫氏の「能絵の展開」及び「宇和島伊達家伝来 能絵鑑 伝来と様式」に指摘あり。(武田恒夫・中村保雄著『能絵鑑』フジアート出版、1973年・武田恒夫・中村保雄著『宇和島伊達家伝来 能絵鑑 百五十番』淡交社、1981年所載)、『能之図式』については東京芸術大学本(正徳5年版、六巻)を参照した。
- (8) 早稲田大学には次の四冊がある。里謠山人 撰、下河邊拾水子画『萬葉小謡千秋樂』天明7年(1787)、速水春曉齋画『昇平小謡萬戸聲』文政6年(1823)、関月・松山半山画『千穂小謡万歳楽』天保12年(1841)、丹羽桃溪画『萬歳小謡昇平樂』安政2年(1855)。

参考文献

- ・法政大学能学研究所編『能楽資料集成10 能之訓蒙図彙』1980年、わんや書店。
- ・大阪市立美術館編『近世大坂画壇』同朋舎出版、1983年。
- ・『日本古典文学大辞典 第一巻』岩波書店、1983年。
- ・小林保治編『能楽ハンドブック 改訂版』三省堂、2000年。
- ・林京平編『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書編第二十五巻 絵入り狂言本集』早稲田大学出版部、1989年。
- ・朝倉治彦監修『訓蒙図彙集成別巻 解説・解題・語彙索引』大空社、2002年。
- ・太田昌子編『絵本・絵手本シンポジウム報告書 江戸の出版文化から始まったイメージ革命』金沢芸術学研究会、2007年。
- ・石黒吉次郎「謡曲の伝説化についての一考察 ―『謡曲画誌』の注釈から―」『専修国文』90号、2012年。

図版出典

- ・『謡曲画誌』は早稲田大学演劇博物館本を、前掲影印本より転載した。
- ・『能之図式』については、東京藝術大学付属図書館所蔵本(正徳五年(1715)版、六巻)、貴重書DBの画像を使用した。
- ・『絵本直指宝』については金沢美術工芸大学付属図書館絵手本DBの画像を使用した。
- ・『昇平小謡萬戸聲』については、早稲田大学図書館所蔵本の画像を使用した。

(表2)

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻1	第1図	翁		翁舞台図	①舞台			舞台全体をやや引き気味に捉える。舞台正先に面箱持、中央にシテ、橋掛かりに千歳・三番叟が座って控える。
	第2図	高砂	1：脇能物	前場	⑤舞台風			前場、神主友成と2人の従者、老婆と老翁が高砂浦で出会う場面。衣裳・人数は舞台通り。
	第3図			秦始皇帝	④故事	秦始皇帝御時	〔十訓抄〕	松に関連する中国故事。始皇帝が松林で雨宿りする場面。
	第4図	田村	2：修羅物	前場	⑥物語風	ただのため標茅が原のさしもぐさ われ世の中にあらんかざりは (※千手観音の託宣)	〔清水寺縁起〕	清水寺の桜の下、童子(前シテ)が僧(ワキ)に寺の由緒を説明するうち、音羽山から月が出る場面。
	第5図			後場	②物語			坂上田村麻呂(後シテ)の話を描画化。安濃の松原(海辺の景)、千手観音の利益で千の矢が放たれ勝利する。
	第6図	熊野	3：鬘物	前場	⑥物語風	草木雨露恵養得花父母	〔平家物語〕巻十	熊野が老母からの文を読む場面
	第7図			後場	②物語	いかにせん都の春も惜しけれど なれし東のはなやちるらん (※熊野の歌)		清水寺での花見の折雨で桜が散り、熊野が歌を詠む場面
	第8図	放下僧	4：雑能	前場	④故事	李將軍	〔史記〕、〔前漢書〕	小次郎が兄を説得するために語る中国故事。母を虎に殺された李將軍が松に矢を射る場面。
	第9図			後場	⑤舞台風	利根信利、兄放下僧、舎弟小次郎		三島明神にて信利と兄弟が出会う。背景に桜。
	第10図	鶉飼	5：切能物	前場	⑥物語風			川岸の御堂に宿した僧二人が、鶉飼の老人に出会う。
	第11図			前場	⑥物語風			鶉飼の老人が松明を振り鶉をとる様を僧に見せる。「鶉の段」
巻2	第12図	難波	1：脇能物	前場	⑥物語風	難波津のさくやこの花冬ごもり今をはるべと咲やこの花 (※翁の歌)	〔古今集〕、〔古事記〕	梅下の老翁(前シテ)と梅の精
	第13図			前場	④故事	高きやにのぼりてみれば煙たつ民のかまどは賑ひにけり (※仁徳天皇の歌)		難波の仁徳天皇の宮に、人生に感謝し民が貢物を持って集まる。

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻2	第14図	兼平	2：修羅物	前場	③名所	世の粟にうきを身につむ柴船や(※短冊形に「一ツ松」「坂本」「八王寺」「粟津森」の書き入れあり。)	『平家物語』	琵琶湖畔の風景の中に、船の僧(ワキ)と老翁(前シテ)
	第15図			後場	②物語			
	第16図	千手	3：變物	千手(一場物)	⑥物語風		『平家物語』	絵巻風に吹抜屋台から重衡・千手が琵琶・琴に興じるさまを描く。背景の襖に杜若。
	第17図				⑥物語風			
	第18図	鉄輪	4：雑能	前場	⑥物語風		『平家物語』	貴船社と溪流、比較的弾いた視点から鬼女と社人2人を描く。
	第19図			後場	⑤舞台風			
	第20図	船弁慶	4：雑能	後場	⑤舞台風		『吾妻鏡』	静御前の居所を訪れる烏帽子姿の弁慶。庭先、屋敷の縁、門や庭木も描く。
第21図	前場			⑥物語	海上、船に乗る弁慶・義経一行。平家の怨霊が黒雲・嵐として描かれる。弁慶が数珠をもんで祈る場面。			
巻3	第22図	老松	1：脇能物	前場	③名所	宰府天神社の景、古寺の舊跡(※境内図の書入「紅梅殿」、「瓊門」、「輪塔」)	『源平盛衰記』	大宰府天神社の境内図。本殿、紅梅、輪塔とともに、参拝する三人の人物を描く。
	第23図			前場	④中国故事			
	第24図	頼政	2：修羅物	前場	③名所	宇治の景、短冊形に「平等院」、「朝日山」、「ウスキノ塔」、「真照寺」、「恵心寺」、「キマンガダケ」、「ヲチカク」	『平家物語』	月下に平等院側から宇治川を臨む。旅僧(ワキ)を案内する老翁(前シテ)。
	第25図			後場	⑥物語			

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
卷 3	第26図	井筒	3：髪物	『伊勢物語』23段	②和画題	風吹ばおきつ白波立 田山よはにや君がひ とりゆくらむ	『伊勢物語』	「伊勢物語」の絵画化。月下、縁際で女が夫を想い「風吹けば……」を口ずさみ、男が門外から垣間見る場面。
	第27図				②和画題			「伊勢物語」の絵画化。井戸を覗く童子と童女。図様は「くらべこし……」を意識するか。
	第28図	鉢木	4：雑能	前場	②物語	雪中の景		雪山を描いた山水図。点景人物として僧（ワキ）が佐野源左衛門常世（シテ）の庵を訪れる場面。
	第29図				後場			②物語
	第30図	国栖	5：切能物	前場	⑥物語風	清美原天皇	『源平盛衰記』 『宇治拾遺物語』	食べ残しの鮎が溪流で生き返る。庵に天皇（子方）、川岸に翁（前シテ）。
	第31図				前場			⑤舞台風
卷 4	第32図	養老	1：脇能物	前場	②物語		『十訓抄』 『和漢朗詠集』	勅使、もしくは雄略天皇が滝に赴く図。樵の青年が滝の酒をくむ。
	第33図				前場			②物語
	第34図	実盛	2：修羅物	後場	②物語		『平家物語』	齋藤実盛が平宗盛に錦の直垂を賜る場面。
	第35図				後場			②物語
	第36図	弦上	5：切能物	前場	③名所	須磨の浦の景		月下の須磨の浦、松林、塩焼小屋。小さく太政大臣師長（ツレ）、従者も描く。
	第37図				前場			⑥物語風

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻4	第38図	紅葉狩	5：切能物	前場	②物語		伝承	戸隠山で紅葉を遊覧する惟茂（ワキ）・従者（ワキツレ）が酒宴に通りにかかる。屏風と幕のみで宴席を表す。
	第39図			後場	⑥物語風			酔い伏した惟茂（ワキ）・従者（ワキツレ）が夢で八幡大菩薩の告げを受ける。
	第40図	遊行柳	3：鬘物	前場	⑥物語風	道のべに清水ながるる柳陰 しぼしとてこそたちとまりつれ	『新古今和歌集』	遊行上人（ワキ）と従者（ワキツレ）が奥州白川で老翁（前シテ）と出会い、西行縁の柳へ案内される。柳の朽木・溪流を描く。
	第41図			後場	④故事	蹴鞠の庭の面 四木の木陰 枝たれて暮に数ある沓の音		後場で語られる、柳ゆかりの蹴鞠の様子。貴族と剃髪姿の俗人が蹴鞠をする図。囲いの四隅に柳、桜、松、紅葉の木。図の「蹴鞠の庭の……」は話の一節。
巻5	第42図	賀茂	1：脇能物	前場	④故事	石川や蟬の小川の清ければ 月もながれをたづねてぞすむ	『賀茂神社縁起』	里女（前シテ）が語る賀茂社の由緒。玉依姫が賀茂川の畔で洗濯をしていると、矢が流れてきて水桶に当たる場面。「石川や……」は鴨長明が御手洗川に詠んだ歌。
	第43図			「賀茂」全体	③名所	社の景		上賀茂社境内図。「本社」「ハレドノ」など短冊形に書き入れあり。
	第44図	鞍馬天狗	5：切能物	前場	②物語風		『義経記』	鞍馬山の桜の下、山伏（前シテ）と牛若（子方）が再会を誓い合う。
	第45図			後場	②物語			牛若と小天狗達が立合をする図。
	第46図	松風	3：鬘物	前場	⑥物語風		『百人一首』など	須磨の浦の浜辺で、僧（ワキ）と松、脇に塩屋。塩屋の前に潮汲み女二人（シテ・シテツレ）松の立木・汐汲み車・水桶は作り物風。
第47図	後場			⑤舞台風	立ちわかれいなばの山の峯におふる まつとしきかば今かへりこん	松風・村雨の亡霊が松の傍で行平を懐かしむ。「立ちわかれ……」は中納言行平の歌。		

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻5	第48図	西行桜	3: 髪物	「西行桜(一場)」	②物語風	花みんとむれくる人のくるのみぞ あたら桜のところがにはありける	『山家集』	都人たちが(ワキツレ)が西行の庵を訪れ、能力(アイ)に花見を乞う場面。「花みんと……」は西行の歌。
	第49図			「西行桜(一場)か	②物語	見わたせば柳さくらをこきませて都が春のにしきなりけり		僧・稚児が溪流脇の柳・桜をながめる。「見わたせば……(素性法師)」を表すか。
	第50図	張良	5: 切能物	前場	②物語		『史記』	張良(ワキ)が眠っている図。横に黄石らしき老人が雲に乗る。夢の告げの絵画化。
	第51図			後場	②物語			自然景の中、橋の上に巻物を持った馬上の黄石公(後シテ)、靴を拾おうと川に入る張良(ワキ)。川には龍の姿。能では龍でなく大蛇が登場する。
巻6	第52図	竹生島	1: 脇能物	前場	②物語	「唐崎明神」「一ツ松」など短冊形の書き入れ。	『竹生島縁起』	琵琶湖畔の唐崎に翁(前シテ)が操る小船が乗りつける。醍醐帝の臣下(ワキ)は船の女(ツレ)に同乗を頼む。舟・翁は「兼平」の図14とよく似る。船は作り物にあり。
	第53図			前場	③名所	竹生嶋乃景、短冊形に「弁天」「ツナギ島」、緑樹影沈魚上樹 青波月沈兔走		月下の竹生島を描いた山水図。波を渡る兔、琵琶湖の魚、参詣する人々。湖上にも僧と女を乗せた船がみえる。図の「緑樹……」は謡の一部を漢詩調に記す。
	第54図	知章	2: 修羅物	前場	⑥物語風		『平家物語』	須磨の浦の浜辺。旅の僧(ワキ)に里の男(前シテ)が平知盛・知章らの物語をする。
	第55図			後場	②物語			須磨の浦の浜辺。知章の霊(後シテ)が語る自らの最期。知盛は馬に乗り沖へ。
	第56図	采女	3: 髪物	前場	⑤舞台風	短冊形に「春日社」、衣裳に「朱」の書き入れ。	『古今集』 『大和物語』 「飛火」	春日社の鳥居の下、苗木を植える若い女(前シテ)の姿を描く。着物に「朱」の書き入れあり。
第57図	後場			②物語	わきもこがねぐたれがみを猿沢の池の玉も見るぞ悲しき、短冊形に「猿沢池」「衣掛柳」	天皇が猿沢池の畔で采女を供養する図。池を大きく描き畔に興、臣下達、衣掛柳。		

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻6	第58図	木賊	4：雑能	「木賊」 (一場)	⑥物語風	そのはらやふせ屋に 生る箒木の ありと は見えであはぬ君か な		信濃園原山で僧（ワ キ）少年僧（子方） が老人（シテ）や男 （ツレ）に出会う。 ツレの人数少ない。
	第59図				⑥物語風		老人の邸内で、老人 （シテ）が子を想い 舞うシーン。舞いを 描く唯一の図。	
	第60図	源氏供養	3：鬘物	前場	②物語風		「源氏物 語表白」	石山寺に向かう途中 で安居院の僧（ワ キ）が女（前シテ） に呼び止められ問答 となる。
	第61図			「源氏供 養」	③名所	石山寺の景、短冊形 に「本堂」「ゲンジ ノマ」「石山明神」 「アライヤクシ」「ミ ナゲ石」		月下の石山寺の全景 を描く。参詣の人々 を多く点景で描き、 短冊風に地名を書き 入れる、名所図会風。
巻7	第62図	和布刈	1：脇能物	前場	⑥物語風			豊前国早鞆の宮。宮 司（ワキ）のもとに 老人（前シテ）と里 の女（ツレ）が訪れ、 神事の様子を聞く。
	第63図			後場	⑥物語風	和布刈の神事	和布刈神事の様子。 松明を灯した神主 （ワキ）が干潮時海 に入り和布を刈り取 る。波間に龍神（後 シテ）の姿。	
	第64図	羅生門 「綱」	5：切能物	前場	②物語		「平家物 語」	源頼光（前ワキツ レ）の邸内、春雨の つれづれに四天王を 集め、鬼退治の話と なる。渡辺綱（ワキ） が名乗り出る。
	第65図			後場	②物語			羅生門に赴いた武者 姿の綱（ワキ）、馬。 風雨が凄まじい。黒 い風で鬼（シテ）の 妖気を表すか。曲名 は目次に「綱」、挿 絵には「羅生門」と 記す。
	第66図	楊貴妃	3：鬘物	「楊貴妃」 (一場)	②物語		「長恨歌」 「源氏物 語」など	宮廷の玄宗帝。処刑 した楊貴妃への哀惜 がつのり、方士に魂 魄のありかを探索す るよう命じる。
第67図	②物語				蓬莱宮	蓬莱宮の楊貴妃を訪 ねた方士。楊貴妃の 脇に侍女。		

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
卷 7	第68図	女郎花	4：雑能	前場	⑥物語風	折とらばたぶさにけがるたてながら 三世の仏に花たてまつる		秋草の茂る月下の野辺。肥後の国松浦方の僧（ワキ）が女郎花を手折ろうとする、老人（前シテ）に呼び止められる。
	第69図			後場	②物語			後場で小野頼風（後シテ）が語る内容の絵。川辺の景。女塚に生える女郎花に頼風が近づくと花が身をくねらせて離れる。
	第70図	阿漕	4：雑能	前場	②物語		『古今六帖』、『源平盛衰記』	伊勢の阿漕が浦、伊勢神宮参詣の僧（ワキ）が牛を連れた里の男（前シテ）に道筋などを尋ねる。農民風だが曲は漁民の設定。背景は刈り入れ終わった田と畦道。
	第71図			前場	②物語	逢事もあこぎが浦に引あみも たびかさなればあらはれやせむ		夜の浜辺、男（後シテ）の蜜鴿が露見し、土地の男に捕えられる場面。前景に小舟と葦。人物の手足が他より細長く、タッチもやや軽妙。
卷 8	第72図	山姥	5：切能物	「山姥」全体	②物語	春山無伴獨相求 伐木丁々山更幽		越後の山を月下の山水画として描く、山すそに小さく山姥を描く。
	第73図			後場	②物語	遠近のたつきもしらぬ山中に おぼつかなくも呼子鳥かな		月下の山道、杖を突いた男が柴を担ぐ山姥（男？）に道を尋ねる。背景に桜。後場の地謡が語る山姥の道案内か。
	第74図	大仏供養	4：雑能	前場	⑥物語風		『平家物語』、『吾妻鏡』	平家の悪兵衛七兵衛景清（前シテ）が、若草の庵に母を落訪ねる。
	第75図			後場	⑤舞台風	衣裳に「ウスカキ」「アサキ」「コン」の色指定書き入れあり。		景清（前シテ）が大仏供養に乗じて頼朝に近づくが、警固の武士（ワキ）に見破られる。警固の武士は歌舞伎風に見得を切るようなポーズ。景清の衣裳に色の書入れ。
	第76図	江口	3：鬘物	前場	③名所	淀川、短冊形に「江口寺」「佐田明神」	『撰集抄』	江口の里の景。淀川畔に点景で曳舟を描く。遊山の船の中にも乗客。江口の寺の前には、僧と女性らしき点景人物。
第77図	後場			⑥物語風	河船をとめて逢瀬の浪まくら	月下の淀川。舟遊びをする遊女たちを、川岸で眺める西行。船は作り物風。		

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる 文学作品	図様詳細
卷 8	第78図	錦木	4：雑能	前場	⑥物語風		『俊秘抄』	陸奥の国、狭布、薄・萩の茂る秋の野辺。僧（ワキ）が錦木を持った男（前シテ）と狭布を持った女（前ツレ）に出会う。
	第79図			後場	②物語	錦木ハ立ながらこそ朽にけれ けふの細布むねあハじとや		後場で亡霊（後シテ）が語る内容。門前から女を垣間見る男（後シテ）、女は後ろ向きで織機を使い細布を織る。女の上に燈火。門前に大量の錦木。
	第80図	雲林院	3：鬘物	前場	⑥物語風	みてのみや人にかたらん桜花 手ごとに折て家づとにせむ、春風ハ花のあたりをよぎてふけ 心づかばらやうつろふと見ん	『伊勢物語』芥川	庵の前に生えた桜の枝を手折ろうとする男（ワキ）をとがめる老人（前シテ）。男の傍らに「みてのみや……」、老人の傍に「春風は……」の歌あり。
	第81図			後場	④和画題	散ぬればのちはあくたになる花を 思ひしらすもまどふてふかな		業平（後シテ）が後場で語る内容。芥川を渡り逃げるシーン。業平の傍らには女。
卷 9	第82図	玉井（目録：玉乃井）	1：脇能物	前場	②物語		『古事記』、『日本書紀』	彦火々出見尊（ワキ）が釣りをする様子。人物は唐子風。
	第83図			前場	⑥物語風	海底部、玉の井		豊玉姫（前シテ）と玉依姫（前ツレ）が竜宮門前の井戸「玉乃井」を覗くと、水面に木の上の彦火々出見尊の姿が映っており、彼を発見する場面。桂の木・井筒は作り物風。
	第84図	俊寛	4：雑能	俊寛（一場）	②物語	鬼界嶋	『平家物語』、『源平盛衰記』	鬼界が島の俊寛（シテ）・成経（シテツレ）・平康頼（シテツレ）
	第85図				②物語			成経・康頼が赦免船で島を離れる。俊寛は残され浜辺で嘆き悲しむ。
	第86図	軒端梅（「東北」の古名。）	3：鬘物	前場	②物語	年月をふるき軒端の梅のはな		曲名は「軒端梅」と記す。上京した僧（ワキ）が、東北院で和泉式部と呼ばれる梅を眺める図。
	第87図			後場	④故事	門の外法の車の音きけハ我も火宅に出にけるかな		曲名を「東北」と記す。後場で和泉式部の霊（後シテ）が語る内容。彰子の御所の前を式部が牛車を通ると、道長の読経が聞こえる。牛の脇に従者・稚児2人、邸に梅を描く。「門の外……」は式部の歌。

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細
巻9	第88図	草紙洗小町	3：鬘物	前場	⑥物語風	まかなくに何を種とてうきさの 波のうねうねおひしげるらむ		大伴黒主（ワキ）が小町の歌「まかなくに……」を裏門から盗み聞きする図。黒主には従者（アイ）が従う。戸の脇に桐の木。
	第89図			後場	②物語			内裏での歌合。黒主の計略が露見した場面か。小町（シテ）、黒主（ワキ）ら中心に7人の人物と、御簾のみで帝を描く。中央に万葉集らしき草紙。
	第90図	藤戸	4：雑能	「平家物語」、藤戸	②物語		『平家物語』	前場で佐々木盛綱（ワキ）が語る藤戸での源平の戦い。小舟から扇を持って挑発する平家の侍と、盛綱・家来が馬で児島湾を渡る様を描く。
	第91図			前場	⑥物語風	幕に「白」、衣裳に「ロウト」の書き入れあり。		盛綱（ワキ）が領主として赴任すると、藤戸の戦いの際に殺した男の老母（前シテ）が息子を返せと訴え出る。
巻10	第92図	邯鄲	4：雑能	「邯鄲」（一場物）	⑥物語風		『枕中記』、『太平記』	廬生（シテ）が羊飛山への道すがら邯鄲の里に宿をとる。宿の前の廬生と女主人（ワキ）。宿は溪流脇、雨が降る。
	第93図				②物語			「黄梁一炊」の図。寝台で眠る廬生、吹き出し風に、夢の中の帝位について行列する様子・宮殿を描く。
	第94図	七騎落	4：雑能	「七騎落」（一場物）	⑥物語風		『源平盛衰記』	頼朝一行が落ち延びる途中、船の中で「誰か一人下船させねば」と思案する様子。海に浮かぶ船の中に八人の武者を描く。
	第95図				⑥物語風			和田義盛（ワキ）と遠平（子方）が、頼朝らの舟と行き会う。

		曲名	演目の分類	図様	分類	曲名以外の記述	典拠となる文学作品	図様詳細	
巻10	第96図	杜若	3：鬘物	「杜若」 (一場物)	⑥物語風	から衣きつつなれにしつましあれははるばるきぬるたびをしぞおもふ	『伊勢物語』	三河の八橋。旅の僧(ワキ)が里の女(シテ)に八橋の業平の故事を聞く場面。背景に杜若の群生・八橋を描く。女の着物にも杜若。	
	第97図				⑥物語風			女が僧を庵に案内し、装束を改めて自分は杜若の精であると名乗る。女の装束は初冠など舞台に似せるが、飾太刀はなし。長絹は張りがなく実物と異なるか。	
	第98図	三井寺	4：雑能	後場	⑥物語風	今宵一輪盈 清光何處無		月下の三井寺。鐘樓で鐘をつこうとする母(シテ)、寺僧(ワキ)、千満(千方)、從僧(ワキツレ)「鐘の段」。作り物にも鐘樓があるが、本図の鐘は実際の鐘・鐘樓を描く。図中「今宵……」はシテの語。	
	第99図			「三井寺」全体	③名所	山寺の春のゆふぐれ来てみれば 入途のかねに花ぞちりける		図中「山寺の……」はクセの部分。	
	第100図	融	5：切能物	「三体詩」、賈島「題李疑幽居」	④詩句	見開きの右図に「鳥宿池中樹」、左図に「僧敲月下門」	『伊勢物語』	「三体詩」中の賈島の詩「李疑の幽居に題す」を描く。見開きに一丁ずつ庭の鳥が柳にとまる「鳥宿池中樹」、月下に僧が友人の庵を訪ねる図「僧敲月下門」の2図を表す。(「融」の謡中にひかれるため)	
	第101図				後場	⑥物語風		水中遊魚疑釣針 雲上飛鳥驚弓影	僧(ワキ)が六条院で池を眺めていると、貴公子の姿で源融の霊(後シテ)が現れる。三日月が池に映る様子や魚・鳥で図中の詩句「水中遊魚疑釣針 雲上飛鳥驚弓影」を表す。背景には塩焼き小屋。
	第102図				後場	①舞台			シテの退場。橋掛かりから揚幕へ。シテは面を着ける。面の描写は本図が唯一。
	第103図				祝言	1か		—	—

図版

※特に書名の記述がない場合『謡曲画誌』の画である。

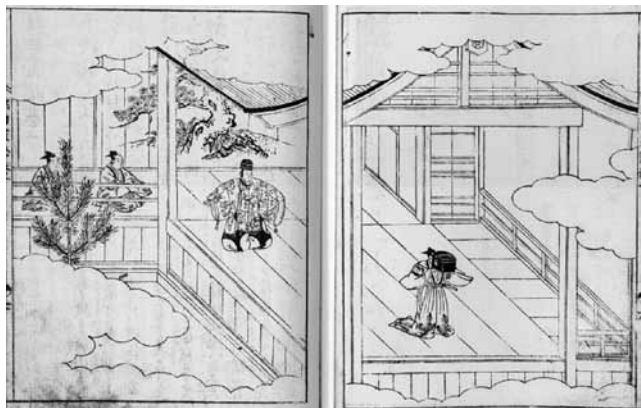


図1：卷一「翁」



図2：卷十「融」



図3：卷十「祝言」

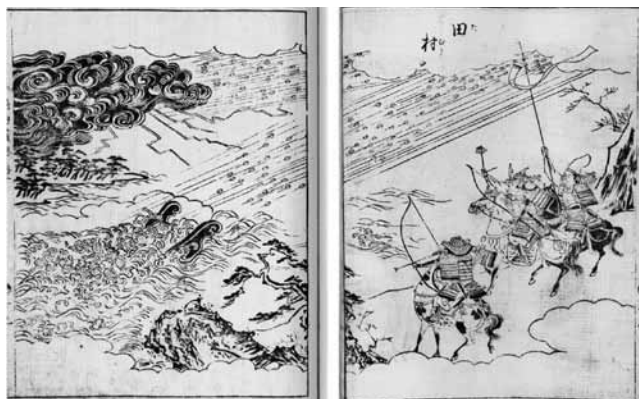


図4：卷一「田村」

図5：卷八
「雲林院」
『伊勢物語』
芥川



図6：卷六
「竹生島」



図7：卷六
「源氏供養」
石山寺の景



图8：卷一「高砂」
秦始皇帝御爵



图9：卷二「難波」

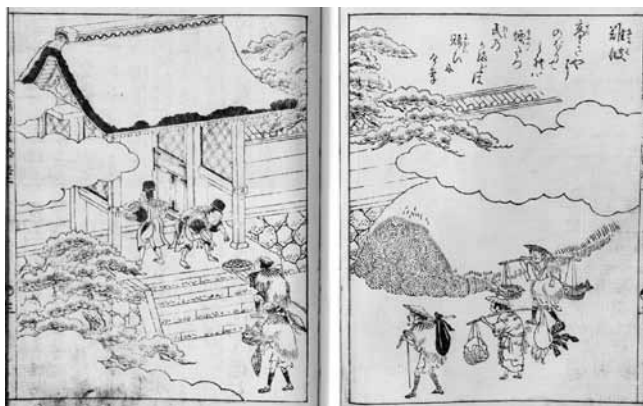


图10：卷五「松風」

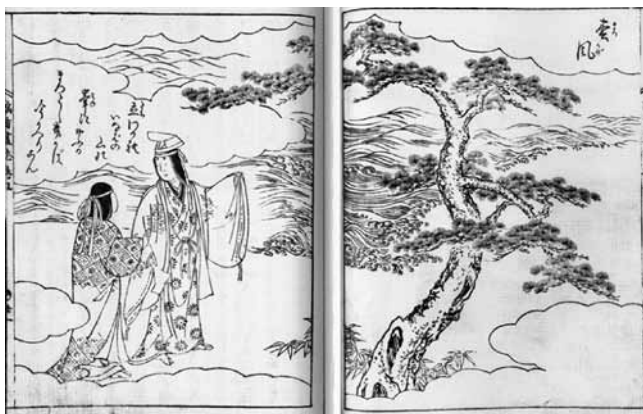


图11：卷六
「采女」



图12：卷一
「鶺鴒」

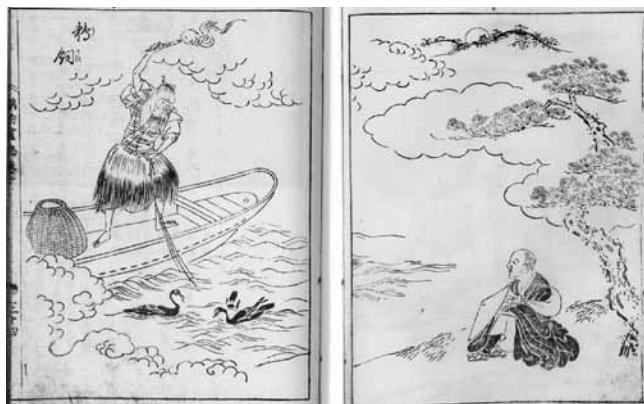


图13：卷一
「放下僧」
李將軍圖

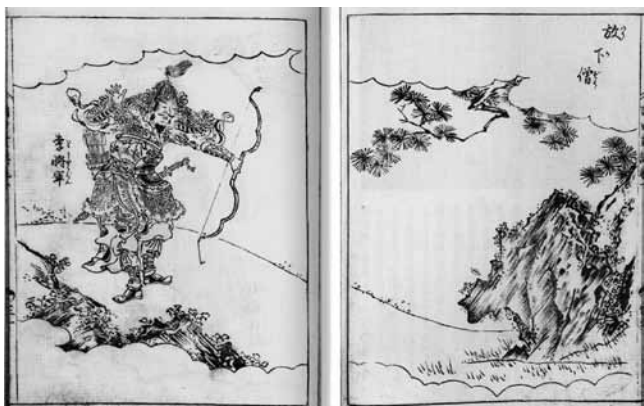




图14·15：守国『絵本直指宝』卷4、李將軍図

图16：卷二
「鉄輪」

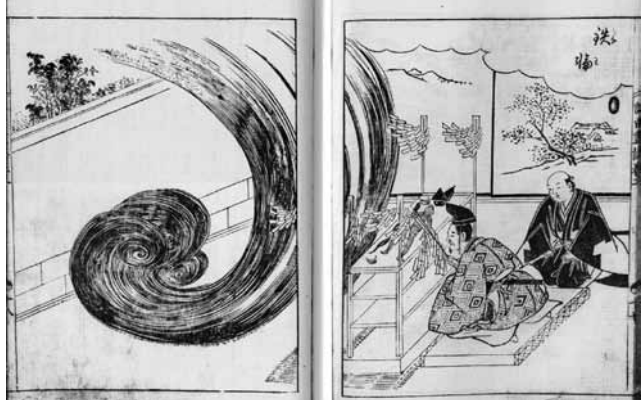


图17：卷三
「国栖」

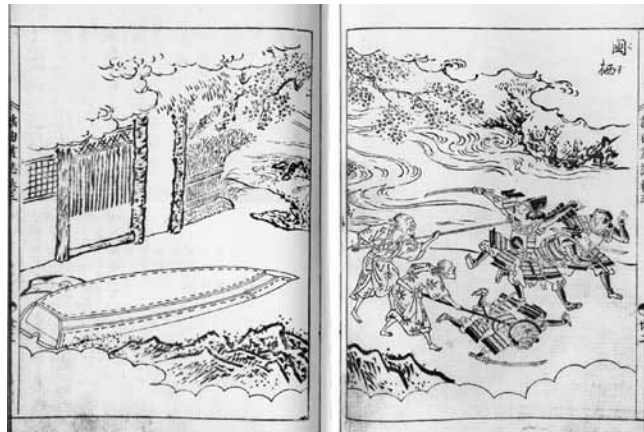


図18：卷一
「放下僧」



図19：
『能之図式』
卷六「放下僧」
正徳5年版



図20：
『能之図式』
卷三「道成寺」

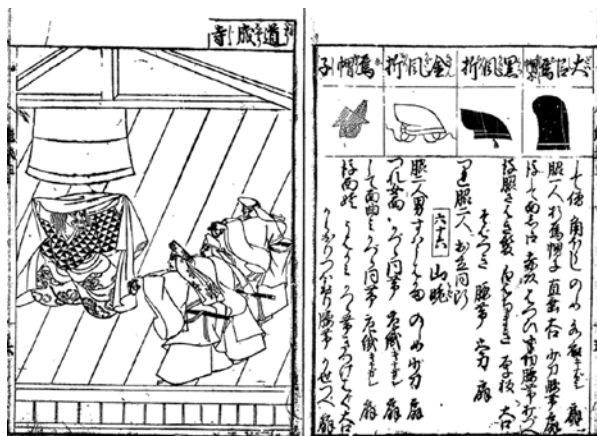




図21 『昇平小謡萬戸聲』 速水春曉齋 画、文政六年（1828）

